福祉はライフワーク ～人の輪に支えられて

(特活)W・I・N・G―路(みち)をはこぶ事務局長

大槻　瑞文さん

大槻　瑞文(おおつき　みずふみ)
1965年生まれ。毎日新聞記者を経て、現在、「(特活)W・I・N・G―路をはこぶ」の理事・事務局長。

写真は大槻瑞文さん(左)と代表理事の菅野眞弓さん

夢飛行、モモの家、機関車、ゆうのゆう、ゆめとべ……。いずれも特定非営利活動法人「W・I・N・G―路(みち)をはこぶ」が運営・支援する福祉施設だ。重症心身障がい者のための福祉サービスを展開し、アットホームな空気が流れる。「人と人との信頼関係に支えられてきた」。事務局長の大槻瑞文さんはそう語った。

利用者本位のサービスを

「これ、頼むよ」「やっといたからね」。

心身障がいを持った利用者からも、スタッフからも、大きな声が響く。大阪市西成区の阪堺電軌・聖天坂駅前にあるNPO法人「W・I・N・G―路をはこぶ」の2階建て建物を訪ねた。

「W・I・N・G」は、the Way Into the New Generationの頭文字で「新しい時代へのみち」を意味する。「道でなく、路。このほうがええやん」と大槻さんは言った。「ゆうのゆう」は友達の「友」、遊びの「遊」、余裕の「裕」、そしてあなたを示す「You」。名前にも活動を支える人たちの熱いメッセージがこもる。

大槻さんが新聞記者から、まだNPO法人になる前の「デーセンター夢飛行」スタッフに転身したのは99年春だった。01年5月に、NPO法人となり、同年10月には、身体障がい者小規模通所授産施設の運営を担う社会福祉法人ゆうのゆうも設立された。

西成区、福島区、都島区と大阪市の3地区で、重症心身障がい者が社会活動を営める場所づくりをめざし、さまざまな福祉事業を展開。通所者約60人、ヘルパー派遣約40人で合わせて約100人が利用し、「信頼関係でここまで大きくなった」。フリースペースでフリーマーケットやコンサート、映画鑑賞会を開き、利用者と地域の住民が交流するなど、地域に根ざした活動を展開する。

「障害者自立支援法」が今年4月に施行されると、利用者は1割負担を求められ、福祉サービスは大きく変わる。サービス内容を変更するかどうか検討を迫られている。

「あくまで、利用者本位で続けたい」。

「『やってもらう』『やってあげる』と一方的でなく、対等な関係を築きたい。だから、利用者のニーズに応える工夫が必要になる」。

「好きなこと言っていた記者時代のほうが気楽だった」とも話す。代表理事の菅野眞弓さんが大槻さんの横で、「どんな制度の変更があっても乗り越えたのはこの人のおかげ」と頼もしそうに語った。

国境も越えた人の輪

活用できるなら何でも取り入れる柔軟さがこのNPO法人の特色だ。ワーキングホリデーの外国人スタッフは、福祉分野では珍しい。6年前から韓国やカナダ、フランスなど7ヵ国から43人を受け入れた。今もフランス人5人と韓国人3人が働く。

最長1年間の期限で働く外国人スタッフが、同じ顔ぶれになりがちな人間関係に新鮮な空気を送り込む。昨年8月から働くフランス人男性、ジル・ミラスさん(23)は、1階のリサイクルショップ「ゆうのゆう」で販売用の衣服を整理しながら「利用者と一緒に色を決める。面白い」。

もう一人のフランス人女性、セシル・コルドバールさん(24)は「表情や目の動きから相手の気持ちがわかるようになった」と言った。言葉が必ずしも十分に通じない分、真剣に利用者に向き合うのだろう。

「外国人スタッフが周囲にも

リサイクルショップ「ゆうのゆう」に集まった利用者とスタッフら。後列左から3人目がジル・ミラスさん

◉特定非営利活動法人「W・I・N・G―路(みち)をはこぶ」事務局
〒557-0042　大阪市西成区岸里東1-5-25　TEL/FAX 06-6656-1280
http://www.yourwing.org/
〔主な事業・活動〕デイサービス、福祉作業センター、グループホーム準備施設、国際交流事業、ヘルパー派遣を通して、重症心身障がい者の支援を行う。

NPO支える決意

「これだけ大所帯になると、どうしても安定を求めてしまう。労働条件だって、おろそかにできない。でも、サラリーマン化したら、NPOらしさを失ってしまう」。

「仕事が(生活費を稼ぐ)生活の目的になってしまうと、自分たちの願いを実現することから遠ざかる。だから大変なんだ」。大槻さんの言葉にNPOの切実さが表れていた。

「夢飛行・モモの家・ゆうのゆう・機関車」後援会の会員は約1000人に達した。後援会呼びかけ人も、記者時代の同僚や同業他社の仲間、取材先の弁護士ら。

「福祉は、自分のライフワーク。新聞記者の経験と人脈が生きている」と語る。実は、大槻さんは、筆者と同じ新聞社で働いたかつての同僚だった。久しぶりに会うと、まじめな性格に落ち着きが加わった印象だった。

「そんなかっこいいものじゃないよ」。

「NPOのやりがいは?」と私が重ねて問いかけた質問への答えだった。気負いもてらいもない。淡々として、しかも自然体だった。取材の合間も宅配便業者への応対やスタッフへの指示をこなした。誠実な姿勢で、着実な成果につなげている。スタッフ約60人を抱えるほど大きくなったNPO法人を支える確かな決意がにじんでいた。

「せっかく来てくれたのに、期待に沿えんかったんちゃうかな」。相手を思いやる気遣いもさりげなかった。

(毎日新聞記者　中尾卓司)

いい影響を与えている」と大槻さんは評価する。